事情

明治太平記

五編 上

村井静馬著

へ遠14
2504
26-9

特
門へ遠14
2504
26-9

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

明治太平記

全

東京書林　延壽堂發兌

雪江

戯

雪江關思敬

岡本弘

松岡磐吉
荒井郁之助

土方歳三

松平太郎
滝川充太郎

駒井正五郎

巻之壹

宮
賊
で

巻之貳

大
傍
の
遂

明治太平記五編

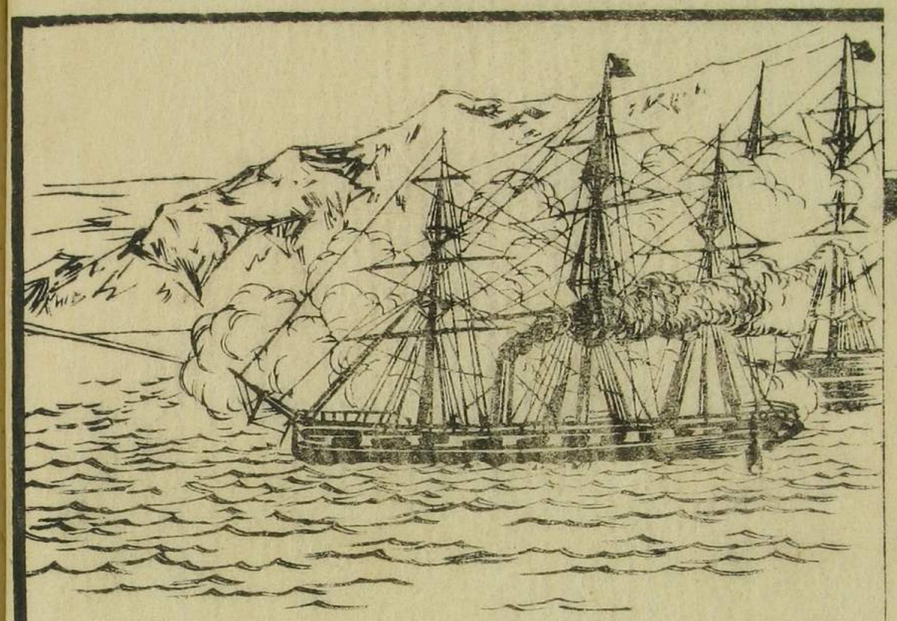
再説回天丸は乗
颶風に會ひ辛く
付たる故俱に函
何れの方へう吹
此港中に敵の軍
二艦の来るをば待

艘ゝて敵の数艘ゝ當るとも豫め方畧を設け不意
ゝ起りく事を成さゞ思ひの侭の働きのちゝばと
言ふ支ゆゝとゝ忽ち一策を施ーて北亞墨利
加の五字を書たる旗章を高く引揚て徐々入港ゝ
程ゝ甲鐵以下の軍艦も實ゝ米艦ゝと思ひく意
をも留めず居たゝーふ回天直ちゝ甲鐵艦ゝ近寄ると
二三歩ゝて急ゝ日章の旗を揚げ甲鐵艦の船腹を
狙ひ大砲数發打掛けーゝと船の全体総くゝる

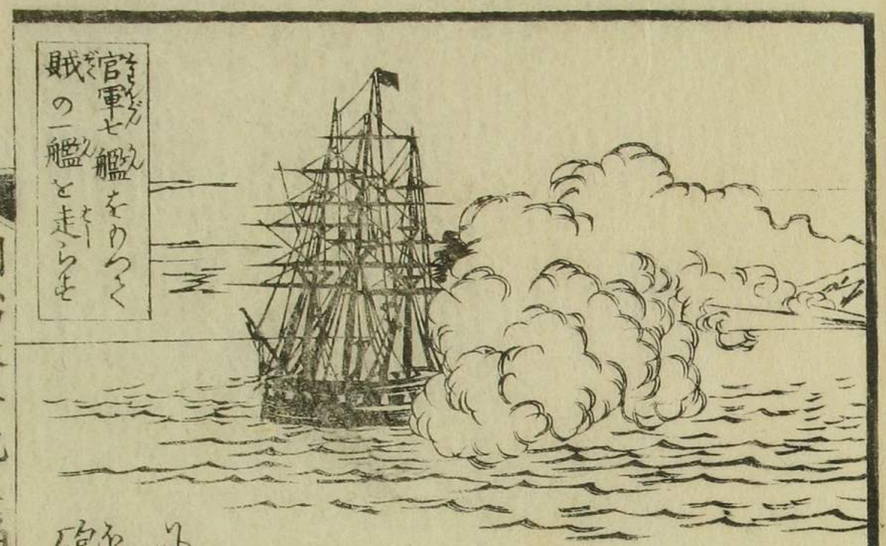
鉄板をめて張たれば弾丸ハ悉く弾き飛んで海中へ
落るのみ一も船板を貫くこと能ゝず是ゝ於く甲
鉄の効勲ゝゝぬを見るゝ足ゝり此時ゝいゝり諸艦
の兵士等始めく賊艦ゝゝ知り共ゝ合旗を揚げ
ても卒ゝふ蒸気鑵ゝ火を焚けども士卒等何れも
狼狽しく直ちふ船を運轉ゝー砲を發ゝるゝを得
ず就中甲鉄の水夫ハ殊ゝ賊艦の砲声ゝ懼れ海
ゝ飛入り死ゝるもあり適甲板の上ゝ出れバ脱兵

矢庭ニ小銃をもて之を狙撃ニ及ぶゆゑ甲板ニ
出る者なし然ども甲鉄艦ハ其造製堅固なる故
脱士等奈何ニ砲撃まれども又此船を破ぶこと能ハ
須臾猶豫ひ居る程ニ此時賊軍の中より一人大塚
波次郎と名告つ刀を振ひて第一番ニ甲鐵艦ニ飛
乗ベ続いて野村理三郎笹間金八郎等数十人短
槍白刃を携へて先を争ひ乗込み来りしニ大いに敵
を痍付れバ官軍の隊長品川士方等烈しく士卒

ニ下知して刀槍をもて之ゆ當り或ひハ六竅砲を発し
て大塚等数十名を遂ニ殪まで及びて什麼らの六
竅砲とハ英語ニ「カツトリングコン」と唱へ彼の野
戦砲の如き車臺ニ架したる六竅の砲ゆ筒の元ニ
鈴ゆりあるを廻まニ隨ひて弾丸を発まるを一分時間
ニ百八十発を為まとハ又此ニ田天の船将甲賀源吾ハ
自ら甲板のうへニ出て兵士等を指揮して五十六行の
大砲を矢庭ニ敵船へ放さるゝ其弾丸忽ちニ甲



鉄艦の甲板を貫き蒸気室に至れるを以て官兵死する者數十名絞聲大雷の落るが如く山嶽も崩るる勢ひなり是に於て官兵等いよいよ憤怒の色と顯はし甲鉄その餘の軍艦よりも齊しく小銃を発し



官軍七艦をもつて賊の一艦を走らす

て甲賀を狙撃する程に一弾左りの股に中り一弾右の腕を貫けども甲賀は尚も屈する躰なく頻りに衆を激まして是非に件の甲鉄艦を打沈めんと圖る官軍も又奮激して例の六竅砲を以て頻りに之を打まくめし

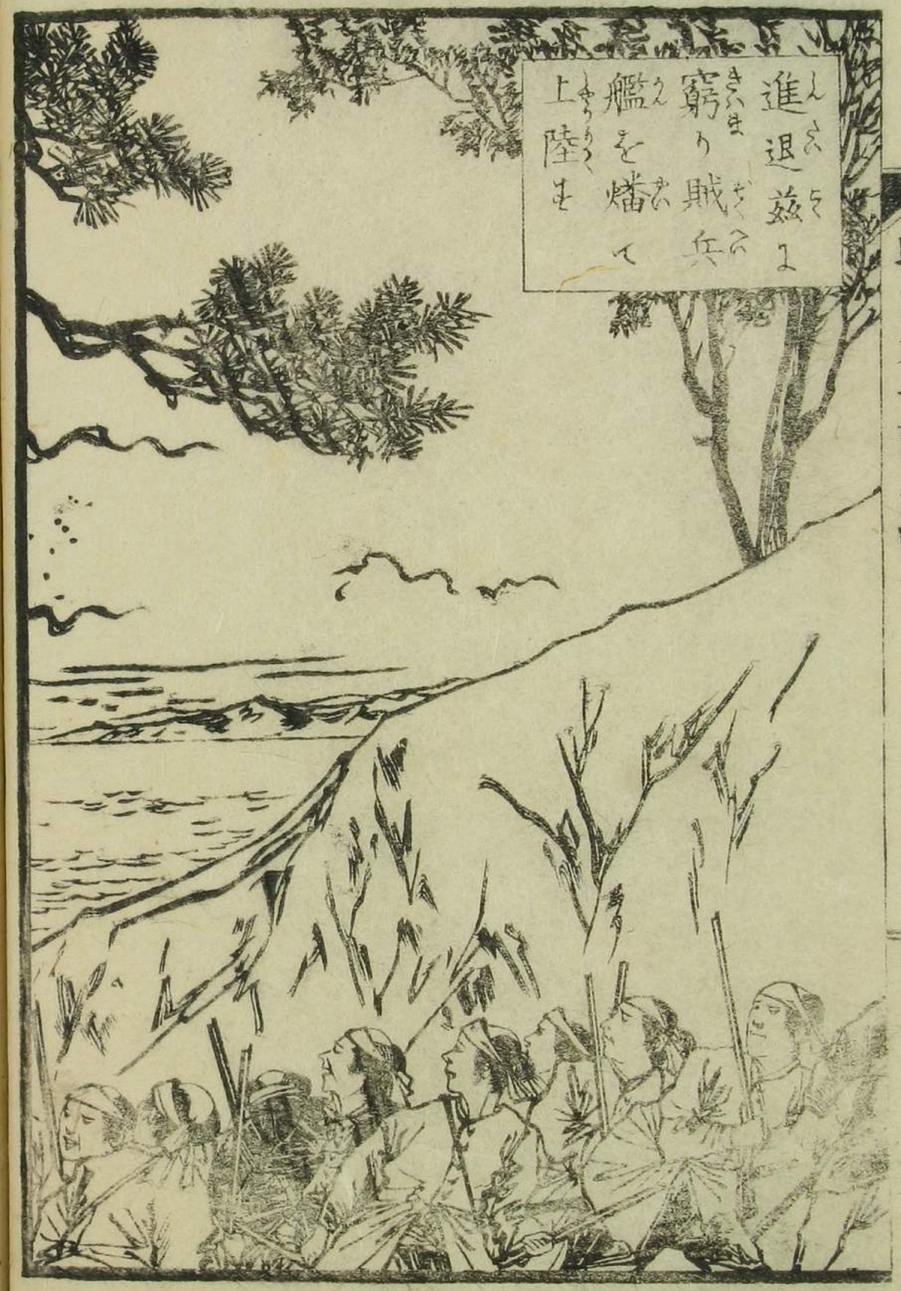
くべ追ひ不敵の甲賀源吾ら
遂に命を落せしくべ賊徒等
如くなるも此時提督荒井
見るに我ら不意に起りしが
躬方勢ひを得たるに似たれ
らも外に援る船なければ
幸にして我が一艦なれば敵の
船に損傷なく退くに如

其船を沖の方へと乗走らせ
ある砲追ひ砲を打掛た
及ぶ物別に変りしあり
時間なれど官軍の死傷百
五十名余に及ぶとは頗る
海軍他邦の旗章を揚げ港
国の旗章を揚ると海軍律の
に倣ふと言ふ而して初め回天

港中に在りて碇泊の位置法律に背けば賊船なるを
忽ちに巨艅甲鉄を衝き来るに及べるも又余は又
蟠竜艦を颶風の為に進むを得ず久しく海上に漂泊
せしに風波少しく鎮りたれば豫て南部領鮫浦に會し夫
より宮古港に攻入るの議を決せんと約せし支度少しく
其期に後るゝと雖も約定の地に至らんとて航して鮫浦
に赴たるに浦内寂寥たる一艦の泊るもなく
わづか忽ち其浦を去りて洋中にて田天
丸ゞ宮古より走帰るに出會ふて始めて苦戦の形
状を聴き其戦ひに援け得ざるを遺憾に思へど詮術なく
其侭揖を轉じて共に函館へ走去り斯くまで高雄
艦に風波の難を凌ぐに蒸気の器械を損ぜし
ゝば自由に運轉する支めなく風に任せて流れを程
に南部の地尾元村に左右しく漂着せしゝ這所は
宮古に遠く隔てゝ田天丸を追うて官船なやくも
これを見付け賊艦ありと知るや襲ひくまを

撃んとまうと思へどもとうあく術哨船に乗館へ帰るハ頻りに船中已に火七隻相議

此地に在ら等ハ轍鮒あく此上ハ専らある程皎りて云ふ軍の攻来ら軍艦をし備へとる


進退茲に
窮り賊兵
艦を燔て
上陸せ

避さしむ因て外國の面々ハ各々自艦よりち乗て何れも此地を退けば又市民等よ過ちあきやうあれを郊外よ立去らせ兵火消防の為よとて水桶の類ひまで街々よ備へ置き備さて陸軍の兵を分けて五稜郭よ八百人函館よ三百人松前よ四百人江刺よ二百五十人福島よ百五十人其餘「モロラン」森砂原川汲等の地ゆも一二小隊宛を置きて官軍の至る後候て却て四月八日よハ官艦七艘青森を発し九日の黎明よ江刺の

近海を乗通り乙部村よ着くや否や陸兵直ちよ上陸して山よ登りて要衝よ據り始め賊軍の方よて官艦かゝるを函館ゟ江刺よ向ひ来るしと手よ唾して待たりしよ思ひ設けぬ所より船を向けると注進なるゆ大いよ手筈ハ違ひしゝど賊の隊長三木郡司等三小隊を率へて敵の上陸せざる所を先だちて之を討んと田沢村よ至る所まで兵後廻しく来りしよ官軍ハ山上よ在りて俯して

まゝ砲撃なせば浦邊より寄りし諸艦よりも岸上な
る賊兵を狙撃まる支甚しき更賊兵遂に支ゆるを
能はず是非なく其場を退きて土場河といふ川を隔て
防戰に及びぬ是時官艦五艘を江刺浦に乘
入れ頻りに大砲を連發なせば賊軍の方にては這回
新築の砲臺より砲を発してられに應じ須臾ハ接戰に
及びしが俄かの支にて其砲臺ハいまだ落成せざる
壁毎に砲を備へぬ防禦心の伺ふ能ハず終に其利なと

度り砲臺を打棄て二股の方へとて兵を引んと為たる
とき彼の土場河の賊兵も嚴しく官軍に逼られて開
処をも支ゆる支悉く稍敗走に及びしが恐くハ防
戰成りがたしとて二手の賊兵本道より松前に走り
しが官軍江刺を恢復せり仍程に賊兵等ハ勢ひ防ぎ
匹きず故に一旦松前に退きたれど何れも憤怒に堪へ
やらぬ再び江刺を取返さんと伊庭八郎松岡四郎
等兵士凡五百餘人大砲二門を牽せて既に江刺に向

そんとせしに官軍も又松前を攻んと兵を二手に分ち
て一を則ち江刺口より一ハ鵜村口より漸次に進んで根部
田村に至るべ伊庭松岡等の脱兵ゞ進み来るふ出會ふ
たり因て両軍兵を交へて接戦に及だんとするとた賊
徒等兵士を山谷に散らし樹木の間に出没して或ひハ
刀槍を以て横さまに中隊を衝き或ハ砲玉を放ちて前
隊を撃つ神速変化窮まりなけれバ遂に官軍大いに
乱れ兵器を棄て敗走るを追ふて江良町に至り
たり此役や官兵の殪る者甚ゞ多く大砲三門小銃
数十挺及び刀槍弾薬の類ひ若干賊手に掠奪せら
れぬ偖此月の十二日薩長の兵数十名暁霧に乗じて
潛やうに木古内なる賊営を襲ひその胸壁に近づく
夜僅に十四五間に至り齊しく砲を放つゆゑ胸壁
殆んど毀れんとせり此時賊の本営より大鳥圭介
本多幸七郎等大いに兵を引率して木古内に馳
来り則ち兵を山谷に伏せ官軍を挾み撃ちに官

賊徒等林間より兵を散しこと大より官軍を脳まし

兵苦戰に及ぶとゝども前後に敵を引受て進むも引くも自由を得ず傍の樹林に潜入りて敵の筒先を避んとする賊徒等得たりと急に擊て大いに之を悩ます此日官軍の別隊なる薩長備後福山等の兵六百餘りの人數にて二股口の賊を襲ふ脱將土方歳三等一大隊を率て當り胸壁十六ケ所より一斉に大砲を乱発し順に新手を入て替る〳〵砲戰に及ぶ程に日ハ晩たれども尚止めず翌十三日の午前七時に至り官兵進擊して支を得ず遂に兵を引て退

是に於て漸く止めり此戰ひの始まりより砲声の止ざること既に十六時の間なれバ其砲を放つ支三万五千余発と云へり此日また仙臺の兵士四百余人兵船より乘て賊徒に来り加わるに依り賊勢いよ〳〵振ひたゝ備十六日松前の脱徒等木古内二股両所に於て躬方勝利を得たりと吹くなり此勢ひを拔ぎ捨て江刺に逼りて取返さんと大挙して兵を発し既に前隊速くも進む

江良町より至りしに官軍則ち春日艦と諜略を合せて海陸より賊兵を挾撃ませ一程より賊将堀内角之助以下の面々大いに苦戦より及びしかど勢ひ遂より窮りて是等ハ多く打死しの残兵ハ辛くしてる松前より逃奔り官軍おの機より乗じて次の日の黎明より甲鉄以下の五艦を率ひ海陸の兵並び進んで松前の城より逼るに賊徒ハ昨日の敗蹟より大いに士卒を失ひたれと尚も氣色も見へを急より残兵を分署して本道折

戸の砲臺より據り敵の陸兵を狙撃まるに傷の者も多くして既より敗走みんとまる支稍三四里より及び飛踏あるへき居る折から別より一手の官軍の山手の方より向ひしまの賊の別軍と戰ふて賊徒追走らせ遂より折戸の裏道より至るに今本道官軍の戰ひ危きより残吶きおを援けて裏手より彼の砲臺より襲撃せしに賊兵前後より敵を受さる又奈何ともまる支能ふて杉山数次郎

松岡が信
義敵中ま
明友の首
級を収む

〻く名たる脱士等數十名茲に至りて打ち斃
され其餘へ堪へぞ敗散せーが斗が中に松岡四郎
等僅に八名踏止まり尚胸壁を成り居るが是
も敵ーがたを知りて遂に胸壁をうち棄て
脱去らんと為たる時彼の八名の其うちに岡田某
と言へる者敵の放てる流丸に中り途中に於て殪
しーに松岡は紙捨置くに忍びず屍を取帰らん
とすれども其暇もなりざるゆへ腰なる短刀引抜きて
首搔砍りー紙携へて辛く其場を去りぬ此時
甲鉄以下の軍艦も已に松前の海岸に乗り付け
齊しく砲発に及ぶ程に賊兵もまれに應じて城内及
び砲臺より撃戦する事數刻に及び終に賊軍の
方〻くを弾薬已に尽たれば防ぐべき術なく
薄暮に至りて兵を纒め海岸の捷路より福島の
方へ落行くを官艦春日丸はを追ふて頻りに砲
を打撃しーど間遠なる故弾丸の一も賊徒に中らぬ

と言ふ信く賊兵退去為たれバ是に至りて松前の城も此日官軍乗取るゝ余バまた賊徒等も戦ひ利ひのゝざるに依り松前を退きて福島に至りしかば此地に百餘人の兵を留め知内木古内の兵士等と応援を做さしめて官軍の押へとして其餘の兵ハ總て五稜郭に退きしは十九日の拂曉に官軍狭霧の中に紛れ枚を啣て進みて木古内の賊営に不意に襲撃為たりし処賊徒ハいまだ臥房を出ざる由断なりなる

折ゝ故寐耳に敵の砲声を听くより大いに狼狽して食を蹴ひけて起出しが爭で支ゆる支を得ん且戦ひ且走りて札苅の海岸まで漸ゝ退きしに官軍破竹の勢ひに乗じあるを追ふ支急なれバ賊兵ども札苅も乗じて泉驛まで走りし時ハ已に正午の頃なりゝ折ゝ知内に屯せし賊軍の一隊ハ躬方難義と听くより卒ふ兵を出しつゝ官軍の後ろを襲へバ泉駅なる脱兵等もあるを為に勢ひ得て兵を還して戦

へハ是ゝ至りて官軍も專ら奮勇を尽まとゝ人ども數刻の間の爭戰ゝ倦労ゝる上るを後ろゝ新手の敵兵起り前ゝ賊徒も始めゝ似ず備へを固めて擊て蒐れバ終ゝ堪へず乱ゝ立て敗道ゝ〻敗走るゝ〻賊軍ハ又木古内を取返ゝ支を得たりとぞ

明治太平記五編巻之一終